Ⅲ. 教育課程の研究

１．研究の経過

今年度も各校で行った教育課程の再編成に基づき、授業の実施方法を工夫しているところである。来年度以降は各会員のレポートや実践を収集しながら活用しやすい教育課程になるよう研究を進めたい。特に、中学校では教科書改訂に関わる調査、検証を進めた。今後、部会員の意見を取り入れながら、よりよい教育課程になるよう研究を進めていきたい。

Ⅳ. 実技・理論研修会

１．研修会の内容

８月６日（水）に「第二言語習得をもとにした豊富なインプット授業実践」と題して明星大学非常勤講師であり、東京都公立小学校英語専科講師としてご活躍の増渕真紀子氏をお招きし、サマーセミナーを開催した。理論としての第二言語習得のポイントを押さえつつ、児童が自然に英語に触れられるようにするインプット中心の授業づくりが提案された。実際に授業で使えるアクティビティも多数示され、教師が英語を話し続ける環境づくりや、意味のある聞き取り活動の重要性が強調された。

２．研修会の成果

まずは、私たちの日々の授業が、acquisition（習得）か learning（学習）か、という増渕先生からの問いがあった。その問いに対して、参加者たちが本講習を通して、日々の授業を見つめ直すきっかけとなった。

また、授業で実践できる数々のアクテビティも、参加者たちが実際に体験をすることで、すぐに実践するイメージを付けることができた。参加者の中からは「明日からの授業で実践するのが楽しみだ」という感想も多く寄せられた。

Ⅴ. 研究の成果とまとめ

１．成果

昨年度に引き続き、今年度も専門部会第二次研究協議会で３つの公開授業を設定し、それぞれ参集して授業参観・研究協議を行うことができた。各授業では子どもの興味関心を高めながら展開につなげる導入にすること、ICT 機器を活用し子どもの学習意欲を高めること、子どもにとって身近なものを題材とすること、学習形態を工夫することを通して、コミュニケーションを図る資質・能力の育成に迫ることができた。また、ワークショップでは、より多く受講できるように工夫することができた。さらに、分科会を小中合同で実施することによって互いの実践を知ることができ、より一層授業や連携に対する意識を高めることができた。

２．課題

ICT 活用の在り方に課題があると考えられる。生徒一人一台端末の導入により ICT 自体の使用は定着してきたものの、その活用が十分に「生徒同士の対話」や「主体的な学び」につながっているかという点には改善の余地がある。今後は、単なる調べ学習や個別作業にとどまらず、思考を共有したり意見を交換したりするような課題設定を工夫し、ICT を対話促進のためのツールとして位置づける必要がある。

また、小学校と中学校の学びをつなぐ小中連携についても、内容や活動のギャップが課題として示された。二次研究協議会の分科会では指導内容・指導言語・学習形態を互いに理解し合い、児童生徒がスムーズに学びを移行できるよう系統的なカリキュラムや指導方法のすり合わせを進めることが求められていると改めて考えられた。これら２点を踏まえ、学校種を越えた協働や指導改善が今後の重要な課題となる。　　（文責　梅津　昴）